
石 川 達 三

新潮社版



日本文学全集 34

石川 達 三

発行／1967年9月15日 十一刷／1969年9月25日
発行者／佐藤亮一 東京都新宿区矢来町71
発行所／株式会社・新潮社 東京都新宿区矢来町71
電話東京(260)1111(大代) 振替東京808 郵便番号162
印刷所／東洋印刷株式会社 製本所／神田加藤製本所
本文用紙／本州製紙株式会社
函貼／三菱製紙株式会社 製函／文京紙器株式会社
カバー・扉・見返／特種製紙株式会社
表紙クロス／日本クロス工業株式会社

乱丁・落丁本はお取替えいたします Printed in Japan 1967

目次

蒼 氓

第一部 蒼 氓

第二部 南海航路

第三部 声無き民

三代の矜持

結婚の生態

四十八歳の抵抗

注 解

年 譜

解 説

久保田正文

五

五

六四

一四六

一八一

二二

三五五

表一

表五

表九

石川達三

蒼*そう
氓ぼう

第一部 蒼 氓

一九三〇年三月八日。

神戸港は雨である。細々とけふる春雨である。海は灰色に霞み、街も朝から夕暮れどきのように暗い。

三ノ宮駅から山ノ手に向う赤土の坂道はどろどろのぬかるみである。この道を朝早くから幾台となく自動車が行き詰ったところから幾台となく後から後からと続く行列である。この道が丘につき当って行き詰ったところに黄色い無装飾の大きなビルディングが建っている。後に赤松の丘を負い、右手は贅沢な

尖塔をもったトア・ホテルに続き、左は黒く汚い細民街に連なるこの丘のうえの是が「国立海外移民收容所」である。

濡れて光る自動車が次から次へと上って来ては停る。停るとぎしぎしに詰っていた車の中から親子一同ぞろりと細雨の中に降り立つ。途惑いして、襟をかき合わせて、あたりを見回す。女房は顔をかしげて亭主の表情を見る。子供はしゅんと鼻水をすゝり上げる。やがて母は二人の子を促し、手を引き、父は大きな行李や風呂敷包みを担ぎあげて、天幕張りの受付にのっそりと近づいて、ヘットとおじぎをする。制服制帽の巡查のような所員は名簿を繰りながら尋ねる。

「誰だね？」

「大泉、進之助でござえまし」

「何処だ？」

「ヘッ？」

「どこだ。何県だ？」

「秋田でござえまし」

所員は名簿に到着の印をつけて、待合室で待っているようにと命ずる。父は又ヘットとお辭儀をして行李を

担ぎなおす。

待合室というのは倉庫であつた。それがもう人と荷物とで一杯である。金網張りの窓は小さく、中は人の顔もはっきりしない程に暗く、寒く、湿っぽい。

「此処さ待ってれ」と父は言つて、行李を担いで人中を分けて入つて行くと、荷物を置く隙き間を探した。大きな棚が三段になつて幾列にも並んでいる。女達はみなこの棚の上に坐っている。男達は荷物に腰かけて煙草を喫っている。妙にしんとして碌々話声もない。子供達が泣きもしない。憂鬱に黙りこくつて、用もないのに信玄袋を開けて見たり、手のひらを眺めて見たりしているのだ。

行李を置いて出て来ると大泉さんはほつとして戸口に立つた。ぬかるみの坂道を自動車はまだ続いていく。はてしもない移民の行列だ。ブラジルへ、ブラジルへ！

遠く、港が灰色にかすんで見えている。その向うには海がぼやけている。そしてその海の向うには、外国がある。ついぞ考えて見たこともない外国という事が今は大きな不安になつて胸を打つ。すると又しても故

郷の山河を思い出す。故郷には傾いた家と、麦の生え揃つた上を雪が降り埋めている幾反幾畝の畑と、そして永い苦闘の思い出がある。しかし、家も売つた畑も売つた。家財残らず人手に渡して了つた。父と祖父と曾祖父と、三つで死んだ子供と、四基の墓に思ひつきの供物を捧げてお別れをして来たではないか。

「本倉さん、まんぢきや？」女房が後から問いかけた。ふりかえろうとした時に、丁度受付へやつて来た一団の家族を見つけて、おう、いんま来た！と言つた。彼は漸く菜々とした微笑を浮べ、煙草を喫う事も忘れていたのに気がついて袂に手を入れながら、頑丈な大きな肩に細く光る雨を受けて受付の方へ歩いて行つた。女房もやつと遣り場のない気持を和らげられて、十三と五つとの子供達にまで「ほりゃ本倉のおんつあんが御座つた！」と言つた。

本倉さんとは杉の叢立ちを隔てて隣り同士であつた。彼は大阪の親戚へ寄つたので一足後れて来たのであつた。彼は六人の家族を連れて、てんでに荷物をかついで、倉庫の入口に立つと愕いて言つた。

「おんや居だも居だも！こりゃ一隻の船さみんな乗

れツかな。心細くねくてえかべどもしゃ」

「ンだ」と大泉さんも同感した。それから人々の間を掻き分けて何とか落ちつく場所を見つけると、知らない人達の肩のあいだに挟まって行李や包みの上に腰をかけた。人いきれがむつと臭くて、雨に濡れた着物の蒸れた匂いが鼻をついた。目の前の棚の二段目には婆さんが坐っていて、鼻水をすゝっては煙管をかちかちと叩いていた。憂鬱そうに唇を歪めて煙草を喫った。

そしてぼんやりと傍に佇んでゐる若者に向つて、勝治仁丹持つてだか、と言った。門馬さんの婆さんは風邪をひいてゐるのだ。勝治は隣りの若者に向つて、

「孫さ、仁丹ねえか、有つたらけれ」と言つた。孫市はまた隣りへ向いて、

「姉しゃん仁丹有つたな。出してけれ」と言つた。紡績女工であつた頬の赤いお夏は、バスケットの蓋をあけた。

洋服を着た洒落た娘がマンドリンを抱いて立っている。父親の勝田さんは革のスーツケースに腰かけて、襟に毛皮のついたインパネスを着ている。半ば白い髷があつて、でっぷりと肥えていて、物知りめいて隣り

の中津井さんという熊本の人に話しかけてゐる。

「そりゃあんた日本とは比べものにならん。気候はね、いつでも合服一枚で済むようなえゝ気候だし、土地と言えばもうその肥えて肥えて、桑がね、桑の苗がね、植えてまる一年で以て、こう！二寸からの直径になる。わしは一つ養蚕をうんとやるつもりですがね、珈琲はもう生産過剰で行き詰りましたな。将来は果樹及び養蚕、殊に養蚕はえゝですよ。現在では絹物は全部輸入ですからな、えゝ」

元気で喋舌つてゐるのは此の人ばかりで、相手の中津井さんも俯向き勝ちだし、彼の多弁が却つてそのあたりの人々を一種沈鬱な不安な気持ちにさせるのであつた。本倉さんは喫い尽した煙草を下駄で踏み消しながら囁く様に言つた。

「大丈夫だべな」

「うん」と大泉さんは答えた。それは体格検査の事であつた。本倉さんはトラホームであつた。そしてブラジル入国の移民の第一条件は（一）、トラホーム患者ニ非ザルコトである。患者はサントスの港から一步も上陸させないでそのまま送り返される。これは移民に

とつて最大の恐怖であつた。しかし本倉さんは郷里の予備検査で合格したからこそ来たのである。

「何としても合格せんばならんねな」大泉さんは決心を固めるようにつぶやいて大きな体を行李の上でぎしぎしと置き直した。すると彼の後に居た麦原さんは、土の浸み込んだように黒い皺の寄つた顔をふり向けて立ち上つた。

「お常、こつちや来え」

十五六になる赤い襟の生々しいお常はお下げにした赤い髪を背に垂らして、父の後から人混みを分けて外に出た。外にはまだ銀色の細い雨が烟のように降りつづいていた。父は烏打帽を傾けて軒づたいに倉庫の裏に回つて行つた。こゝならば誰にも見つかることはない。たゞ軒滴が光りながら並んで落ちて来るだけだ。

お常は父が何をするのかを知つていた。だから父の前に立ち止ると目を閉じ、じつと顔を上に向けて待つた。少し蒼白い弱々しい顔にしぶきの様に小さな雨の粒が冷たく落ちた。父は袂からロート目薬の小瓶を出して、輝の切れた大きな手で不器用な点眼をしてやつた。(何としても合格せんばなんね！)

ぬかるみの坂道を自動車はまだ続いていた。三ノ宮駅に汽車が着くたび毎に、親子手を引きあい、荷物をかつぎ、ぞろぞろ下りて来るのだ。殆んど大部分の者が始めての自動車というもののためらいながら乗るのだ。その車の行列を横切つて、灰色に暗い雨空にりんりとけたゝましい鈴の音を響かせて、号外売りが叫びながら走つていた。ロンドン軍縮会議が丁度真最中である。朝の新聞では軽巡洋艦の艦型制限で議論沸騰し再び委員付託となつた事、アメリカは依然として大巡十八隻案を固持しているという事、而もこの問題をよそにしてイギリスはシンガポール要塞の工事中止声明を裏切つて工事費の増額予算を議決した事を知らしている。一方では現職文部大臣小橋一太が越鉄疑獄に連座して、辞表を出した匆々に起訴拘留された事を報じている。物情騒然として暗澹たる中に、胸を刺すような鋭い号外の鈴の音が絶えず移民の自動車の行列を突つ切つて走つてゐるのだ。

午前十時、黄色いビルディングの中から騒がしい銅鑼が鳴り響いて来る。すると所員が受付の天幕の中から名簿を持って出て来る。倉庫の入口に立つて身動き

もならぬほど詰っているお百姓達に向つて叫ぶ。

「只今から体格検査がありますから、名を呼ばれた人は家族全部を連れてあちらの建物に行つて下さい。順番にです。荷物はそこに置いたまゝで宜しい。いゝですか、もう一ぺん言いますよ。名を呼ばれた人は……」

倉庫の中は急にざわざわとして荷物をまとめて立ち上る用意を始める。所員は北海道から順番に青森、秋田、岩手と呼び上げて行つた。呼ばれて倉庫を出た者は女房を促し子供の手を引きながら、細い雨が斜に降る中を黄色い建物までぞろぞろと歩いて行く。入口を入ると暗い長い廊下が真直ぐに伸びていて、その廊下に列を造つて待たされる。先頭から順次に名を呼ばれて医務室に入つて行く。そこで上半身を裸にさせられて、背と胸とを銀色の小槌で叩かれて、次に脛の皮を裏返しにめくられて、その二つに合格すると室と寢床との番号札を渡される。それを持って次の室へ行く。そこで当収容所に於ける生活の注意を与えられ、首からぶら下げる様に紐のついたセルロイドのサックに入れた食堂「バス」を貰う。このバスがなくては飯が食

えないのだ。

廊下に並んだ人達の間では、雨に濡れた着物から発する悪臭と濡れた女の髪から発する悪臭とがむっ、と温かくて、暗い片隅に踞すわまった大泉さんは、(何としても合格せんばなんね!)と本倉さんに言うともなしに言つた。すると麦原さんは今一度お常を促して洗面所に行つた。そして人の居ない隙をみて又目薬をしてやつた。

「佐藤勝治……妻夏」と係員が大きな声で呼び上げた。お夏は、弟や知らぬ人達の前で妻と呼ばれるのは始めてであつた。彼女は伏目になつて勝治の後から医務室に入つて帯を解いた。その姉の頬が林檎の様に赤いのを弟は美しいと思つた。

「佐藤勝治の母馬くら。弟門馬義三。……妻の弟佐藤孫市」

孫市は名を呼んでゐる所員の前を通る時叱られはせぬかとびくびくしていた。姉のお夏と勝治とは本当の夫婦ではないのだ。友人の門馬勝治を婿にして形式だけ佐藤の籍に入れたのだ。そうして(満五十歳以下ノ夫婦及び其ノ家族ニシテ満十二歳以上ノ者)を以て家

族を構成しなければ渡航費補助移民の条件に合わないからだ。門馬さんは婆さんと二人の息子、孫市は姉弟。この二組が一緒になって一族という形式を臨時に作ったのだ。然し是は孫さんの知恵ではない。移民取扱海外興業会社の地方業務代理人山田さんが教えてくれた術だ。——叱られるどころではなかった。係りのお役人にとっては平凡過ぎる事である。むしろ奨励してもいゝ位だ。そうすれば海外発展の成績は上り国内の人口問題も多少は助かる。海外興業会社にして見れば移民が一人でも多ければそれだけ社業殷盛だし、

地方代理人山田さんにしても自分の扱った移民については歩合が貰える訳だ。孫市よりもうまいのは物知りの勝田さんだった。彼は移民会社に託して五千円をブラジルに送つてある。そして現に懷中に三千円を持っている。これだけ財産が有つては渡航費補助は貰えない。自費で行くとすれば家族八人二百円ずつで千六百円かかる。そこで考え出したのが自分の十六になる娘を親戚の青年の嫁に仕立てる事だ。相手の青年は検査前の青二才だからこの男を戸主にしてえば、戸主は無一文だから当然移民になれる。すると勝田さんは妻

の父である。勝田一族は妻の母、妻の兄弟という名目で、かくて立派に船賃千六百円をまる儲けした。拓務省をペテンにかけた訳だ。

麦原さんはお常のことが気になった。しかし目葉の効き目で（当收容所に於て療養すべし）と言うだけでひと先ずパスした。そして本倉さんは「隣りの室で待つて居れ」と言つて後回しにされた。

後回しにされた中に熊本から来た黒川一家があつた。夫婦の間に十一を頭に九人の子がある。而もそれだけでは移民家族にならないので親戚の十三になる女の子を入籍して連れて来た。都合十二人だ。最後の子供は生後三カ月である。規則には六月未滿の嬰兒は許されないのだ。医者はこの子を見た時にはッとした。思わず、これは！と言つた。

「君、ちよつと、見給えー」と彼は隣りに居る医者に言つた。

「恐ろしい栄養不良だよ」

この子は蚕の様にぶよぶよで蒼白く透きとおるような肌の下から静脈の網目がすっかり見えていた。凋びて皺の寄つた小さな顔、眠るでもなく醒めるでもなく

唯ぐったりとしてゐる表情。目を開く力もなく声を立てて泣くことさえも出来ないのだ。

「乳を飲むかい？」と医者は吃り乍ら訊いた。母親は両手にこの子を抱いたまゝ、ぼんやりと窓の外の雨を眺めていて返事もしない。医者は父親をふりかえつた。大きな体格をした父は右の手の甲で鼻水をこすつてそれを左手で揉み消している。その三人を囲んでうようよと九人の子供だ。その中の三人の女の子は頭に虱が霜の降つた程にたかつていて、中の一人は頭一杯の腫物で膿が流れて髪が固まつて悪臭を放つ中を虱が歩いている、二人の医者は呆れてこの白痴のような夫婦をつくづくと眺めた。是は人間であるか獣であるか。そして毛むじやらの熊の様に遅い本能の姿をまざまざと見たように慄然として顔を見合した。（郷里の予備検査の医者は何をしていたんだらう？）そして兎も角も後回しときめた。

体格検査の済んだ者は順々に自分達にあてがわれた室を探して階段を上つて行つた。四階の第九号室、室は中央に四尺の通路を空けて、あとは両側にびっしりと十二のベッドが床のように連なっている。通路には

二つの長椅子と一つの長い机。大泉さんは此のベッドの上に胡座をかいて、大きな肩を元氣よく聳やかして女房と子供達とを見返つた。合格した！それは愚痴を言いたくなつては押え押えして来た従順な女房にとつてもほつとする事だつた。（移民になるのは、やんだねは！）彼女は幾度か夫に向つてそう嘆息しようとした。しかし今は漸く夫の元氣な日に焼けた顔に向つて微笑を返すことが出来た。

麦原さんの一家と門馬さんの一家とが同じ室に入つていた。他にベッドが一つだけ空いていた。大泉さんは最初に誰かに話しかけたくなつた。彼は善良な明るい顔をして言つた。

「お互えに、合格してえかつたしなあ！」

「あ、ふんとにえかつたしなあ！」と麦原さんが乗りだして来て言つた。「おりや、娘がトラホー目で、ほりや心配したし。ンだどもいや、此処で療治せばえんだして」

「えかつたしなあ。あんた秋田県でねしか？」

「青森だし。秋田さ近え方だども」

「俺秋田県だし！」今まで鼻唄をうたつて行李を片づ

けていた孫市が言った。

「湯沢だし」

「ほ！俺あ田沢だし」と大泉さんが一層元気づいて言った。それからもう打ちとけた話が糸をほぐす様にすらすらと出て来た。それは知識階級の初対面と違つて虚栄も探索も警戒も軽蔑も、一切ぬきにした急激な親しみであった。そのうゑ皆が同じ目的をもつて集つて来たのだ。言わば誰もかれもが日本の生活に絶望して、甦生の地を求めて流れて行こうとする、共同の悲哀を胸に抱いているのだ。それが一層早く皆を親しくさせるのだった。そしてこれ等の友達と親しくなつて行くに連れて、この幾日、家財整理やら後の始末やら、又は自分が精根を掘り埋めて来た田畑との別れやら旅立ちのごたごた迄、まるで自分が死んで行くかのように重苦しかった心、逡巡し、暗澹とし悄然とした心が、今になって始めて明るく揉みほぐされて行く様に思われて嬉しかった。

たゞ一人、門馬さんの婆さんだけはいつ迄たつても憂鬱だった。ベッドの上に背を向けて坐つて、ベッドの縁の鉄枠に例の煙管をかちかちと叩きつけては

口をへの字に歪めていた。誰も話しかける事も出来ないほど意地悪い様子だった。婆さんは風邪を引いて憂鬱である。それよりもっと頼に障るのは勝治が佐藤の籍に入った事だ。

「だからな、ブラジルさ着いたら直ぐに籍は戻すんだ。ンでねば誰も行かれねべー」

と勝治がいくら言つても駄目なのだ。大体ブラジル三界まで行かねばならないと言うのが、勝治も義三も甲斐性が無いからだと思つていた。尤もこの兄弟は少し頭の足りない方ではあつたが。

窓の下を号外の鈴の音が走り過ぎた。雨は一層細かく霧のようになって横に流れている。港は遠く灰色にぼやけている。

「本倉さんの室、どこだしべ？」と女房が言った。大泉さんは、うむ、探して見ツかな、と言つて立ち上つた。廊下で銅鑼が鳴つた。

「何だ？」と頭の足りない義三が言った。

「あれは飯だ」と孫市が言った。「姉ちゃん飯食いに行くべ。あの食券持つてな」

「あゝ腹へつた。行と行と」と麦原さんが女房達を促

した。この女房はだらしない女で、襟が開いて乳房が見えるのも平気だし、寝そべって膝の出るのも何とも思わない女だ。

食堂は一階にある。四階の三十の室からぞろぞろと廊下にあふれ出た移民達は各々の室で友達は出来たし、検査には合格したし皆めつきり明るい顔つきをしていた。口笛を吹く者もあり、階段の欄干を這る子供もある。食堂の入口に來ると制服の所員が立っていて、一々食堂バスを持っていかどうかを検べている。そこを通過して中に入ると、飯と菜との蒸れた臭いがむつと鼻をつく。八人に一つの長い卓を両側から囲んで坐る。同室の者は誰言うもなく一緒に坐るのだ。だが食事は何とはなしに囚人の食事を思わせる。一つの皿に油揚げと菜っ葉の煮つけたのがベタリと叩きつけた様に入れてある。大皿に八人前の沢庵漬がある。八人に一つの飯櫃と茶瓶とそれつきりだ。しかし村で散々貧乏をして来たお百姓には食える。麦原さんも大泉さんも元気に何杯も食べた。

「うまくねなあ」自転車職工であった門馬義三が言った。すると向側から孫市が、「文句は言われねえべ。」

天皇陛下の御飯でねかよ！」とたしなめる様に言った。

「ンだンだ」と大泉さんも大きく肯いた。

だが金持ちの勝田さんには食えなかった。殊に絹の着物を着たその女房には食えなかった。彼女は夫の耳に口を寄せて眉をしかめて「十五日まで此の御飯じゃ困りますねえ。お金を出しても他の料理は貰えないんでしゅうか」と言った。勝田さんは、

「船の御飯はもつとまじいよ。麦飯だからな」と覚悟をきめたように答えた。

食事を終って又四階まで上って行く時に、孫市は物に脅えたように無口でいる姉に言った。

「飯食って直ぐ四階まん得上るのも菜でねえなあ姉しやん」

お夏は愛する弟の元氣な顔を見てそつと微笑みだけであった。彼女は堀川さんの事を思っていた。紡績の女工監督の堀川さん、彼女に結婚の申込みをした男のことを。(若しもあの申込みがもう一カ月早かったならば!)彼の申込みは弟が移民になるのを決心した後のことであった。彼女は当惑して、

「少し待ってたんへ。弟さ訊いて見ねば……」と言つて返事を延ばした。けれども、自分が結婚すれば弟の家族構成は崩れる。お夏はその事をとうとう弟に言わないでしまった。この元氣な弟、このたつた一人の肉親をがっかりさせたくなかつたから。そして有耶無耶のうちにくままで来て了つた。郷里を出るまでは左程に苦しくも思わなかつたのに、別れて来てみると、殊に外国へも行くとなつてみると、今更慕わしく思ひ出される。彼女は弟に遅れて階段の欄干を撫でながら考え考へ上つて行つた。

体格検査で後回しになつた黒川一家は合格ときまつた。どう考へても不合格に違ひないのだが所持金がたつた二十円では九州まで帰す訳にも行かない。これで親子十二人が地球の果まで行こうと言うのだ。移民になつて了えばブラジルの農園までは、旅費も食費も要らないからいゝ様なものの、不合格にしたら始末に困る。トラホームでないのを幸いに医者合格の印を捺して了つた。(ブラジルへ棄てにやる様なもんだが)と考へて彼は苦笑した。

けれども本倉さんは不合格にされた。彼のトラホー

ムは案外に悪かつた。而も戸主である。是が子供のことならば、その為に一家全部が不合格になる事を思つて合格にすることも出来るのだが――。医者は氣の毒そうな表情をして(あなたは不合格である)旨をやさしく言つた。極くやさしく言つた。すると本倉さんは目脂のある赤い目をあげて医者顔の顔をまじまじと見た。そして問い返した。何度も何度も問い返した。それから頭を下げて頼んで見た。けれども無駄であつた。

「ブラジルから送り返されてもいゝかね? え? それでは余計に辛い思いをするばかりだよ。早く療治して又来るんだね」

本倉さんは悄然として医務室を出ると大泉さんの室を探して四階まで上つて来た。大泉さんは飯の後の煙草を喫っていた。彼は本倉さんが入つて行くと、おう! と喜んで言つた。

「インマ訪ねて行くべと思つてたところだ。お前の室どこだ?」

本倉さんは微かにほゝえんだ。そして此の友達と別れねばならぬ事に胸が苦しくなつた。大泉さんの女房